

INTERDISCIPLINARY RESEARCH PROJECT
CREATION OF EAST ASIAN KYOUSHI STUDIES
TO LIVE TOGETHER IN COLLABORATION

CEAKS

交響する
アジア

CEAKS最終討論会

富山大学発「これからの
日本と東アジアを考える」

～新たな人文社会知をもとめて～

報告資料集

2013年3月10日（日）

会場：富山国際会議場多目的会議室

目次

- 01 問題提起
- 02 日程
- 03 基調講演
- 04 発題者資料
- 05 参加者プロフィール

01 問題提起

「3・11 後の日本と東アジアにおける新たな人文社会知の創成」

CEAKS 代表：佐藤 幸男

環日本海域交流拠点のひとつである富山大学が人文社会芸術系の教育資源を活用した「東アジア「共生」学創成の学際的融合研究」プロジェクトもこの3月末をもって第一ステージを完了する。この研究プロジェクトがスタートしたのは2010年である。それから3カ年の間にはさまざまな出来事がわたしたちを悩ませてきた。日中国交正常化40年、日韓併合100年、歴史の節目にまたがる歴史認識問題にくわえて、国境と領土をめぐる隣国とのあいだに対立がおこった。それに、今年の3/11日本が体験した未曾有の大災害は、日本社会が震災、津波、原発という人類史上初の三重のカタストフィ（破局）をひきおこすことで新たな問題群が加わった。それに呼応するかのようにして、「安全」と「安心」「連帯」「絆」が奇妙にセットとなったこのことばが、現在で最も威力を持つものとなっている。

3/11から丸2年を迎えたこんにちの日本社会はしだいと『無関心の闇』のなかに進もうとしている。日本の『変わらなさ』の中核になにがあるのか。被災者と避難者への賠償、原発事故の原因と責任、復興事業の行政手法などをみると、そこまでに至った過去の経験、「失敗学」が繰り返されているかのように見える。

文芸批評家の加藤典洋は、9.11の同時多発テロは『戦後』ではなく、『世界』という枠組みで思考する必要性を感じさせ、また、3/11では世界は資源や環境の有限性から考えなければならない「リスク近代」に立ち至っていると指摘している。「戦後」という思想の射程のなかで、あらわになったこの「リスク近代」という指摘は既成概念と「知」のありかたに深い問いを投げかけているように思える。

3/11が人災であるのは、津波についていえば、近代化、発展という名の下で経済効率を優先させ、自然を制御するという思想を極端に進め、甘い想定のもとで堤防を構築してきたことである。さらに、日本社会の組織構造の特質である利益優先と近代科学信仰の構造を『原子力ムラ』と呼ばれる人びとがつくりだし、異論や疑問を排して、一方的な発電を押し進めてきた。これは自然との共生、協働という関係からみれば「近代以降の生活のありかた」を問い直すと同時に、民主的な市民社会をどのように創っていかなければならないのかという課題にも連なっているのではないだろうか。わたしたちは、あらためて自然と人間が共存する社会、多くの民族が固有の歴史と文化を大切にしながら、対等に共存できる社会をめざすための『共生』という新たな希望・価値について深く考えさせられることになった。

2011年3月11日午後2時46分の地震と津波によって60万人が浸水地域で

被災し、約2万人の命が一瞬に失われたこの大災害は、日本のみならず、アジア近隣地域の歴史認識問題とも連動するかのようになっている。その対立の構図を超克するための新たな思考の模索が必須となったのである。なぜなら、沖縄の基地化、広島／長崎の原爆禍、そして福島原発事故のあいだには歴史的、時間的、地域的に共通した時間が連綿と流れており、これが日本の立ち位置であり、居場所であり、日本と世界を展望する鍵がそこから生まれると考えるからである。

本プロジェクトを締めくくるにあたって、この「ファイナル特別セッション」は、『新たな人文・社会知』という課題のもと、3/11以後の人文・社会知のありかたをとりあげ、『東アジア』に見いだされる社会的規範的価値を探究しようと企画された。

2010年日本学術会議日本の展望委員会「世界とアジアのなかの日本分科会」は「人間中心のアジア、世界に活躍するアジア：互惠、互敬、協働の精神にもとづいて」という報告書をまとめ、アジアを創造する新たな学術的に探求方策を提示した。いまだ、アジア共通の認識枠組みが存在していないことを明示している。わたしたちは、先月、韓国ハンシン大学で、本研究プロジェクトの成果報告会を開催し、数多くの韓国知識人たちと対話し、われわれの研究成果をさらに発展させるために協働していくことを約束した。そこでは、歴史認識の共有のみならず、3.11の体験や問題を相互に共有することの意義についても話し合われた。それは3/11以後、研究分野でも政治・行政学、公共政策研究では「ガバナンス」、社会学や人類学では「公共性」「連帯」とか、「ネットワーク」といったことばがキーワードとして頻繁に用いられるようになったことから、これらがアジア共通の新たな認識枠組みとして醸成されつつあるといえるようになったのである。

本シンポでは、被災2年目となる3/11の出来事を再認識し、問題を共有することからはじめたい。3/11後「南海トラフ」「首都直下型地震」予測などに象徴されるように、地震活性期に突入した日本、さらには自然・環境災害はアジアにおける死者数の増加をもたしている。戦争による死者よりも自然災害、地震・津波が近年増加しているアジア世界を視野に入れながら、人類が切り拓いてきたテクノロジーの陥穽に眼を向ける必要がある。それは近代テクノロジーの肥大化、巨大化が手に負えないほどの事故をひきおこしたという現実を直視することからはじめねばなるまい。

たしかに、近代化、経済発展、開発の恩恵は限りないが、ひとたび制御を外れた場合のリスクは甚大であることである。それは3/11が日本社会にもたらした甚大な被害ばかりではなく、科学知や学術研究にたいする未曾有な衝撃と反省をもたらしたという認識の共有である。人間が生み出した危険は空間、時間、社会、国家、地域の区別を超えて浸透し、これをコントロールするには全く新たな制度が要求される。

人文・社会科学は本来、人間・文化・社会を研究対象とし、知的社会の推進に傾注するという責任を負っている。社会の安定や幸福に貢献すべき学術として、自然の大きな営みのなかで発生した災害、これから想定されうる災害にどのように向きあうことがで

きるような人間・社会の研究活動を構想することが可能か、この設問に人文・社会科学に従事し、関与する者が応答する責務をもっているからにほかならない。

文部科学省の科学技術学術審議会学術分科会は『リスク社会の克服と知的社会の成熟にむけた人文学および社会科学の振興』と題する提言を昨年（2012）7月にまとめた。この提言のなかでは、自然災害、地震予知、原子力利用など理工学的な専門知、科学的知見等とよばれる矮小的に問題領域に特化して論じられるのではなく、人文・社会科学分野においてもその知のありかたが問われていることを論議の出発点としていることである。その提言のなかで、リスク社会の克服と知的社会の成熟にむけた人文学および社会科学の振興するためには、①研究分野間の相互理解と認識枠組みの共有の必要性、他分野の研究者との共同研究プロジェクトの機会の創出、その具体的な研究推進事業の事例のひとつに『共生』研究を掲げている。②2010年代からEUで採用されている学際性や多領域性は科学の領域での融合をさす方法論であるいっぽうで、社会が関与する分野を超領域的研究と使い分ける目標設定の重要性が述べられている。この提言からも分かるように、文科省の人文・社会科学に関わる研究推進事業に掲げられる本研究プロジェクトの「共生」学探求の成果は、広く社会に発信しなければならない課題であることが指摘されている。

くわえて、この報告書にも言及されている「新しい知性への展望」課題には、現代の「リスク社会」に対応した新たな社会システムのありかたの検討、世界共通課題の論点をつくりだし、アジア地域の文化特性を考慮する自然や環境、公害問題解決にむけた国際的ルール作りに貢献する知見を歴史学、経済学、政治学、法学などの観点から探求することが重要であると指摘している。

3/11以後、顕著となった地震多発地の日本、東アジア全域における自然災害の多発、環境リスクの増加などを考慮すれば、ドイツの社会学者であるウィルリッヒ・ベックの予測不可能な世界の『リスク社会』論、『リスク化する日本』論がひとつの論議の対象となろう。

地域社会学者の山下祐介は、近著『東北発の震災論』（2013年刊、ちくま新書）のなかで次のような指摘をしている。「ある箇所での生産活動は全世界で展開している生産工程と結びつき、一箇所で生じた破壊が世界の産業生産に直接影響を及ぼす広域的システムが構築されており、このシステムにいったん問題が生じると個人ではそれをどうにもできない。電気、ガス、水道、高速道路、電話、インターネット、新幹線などがそうであるように、これらがあるからこそわたしたちは生活できているが、そのシステムに障害が起これば、個人はどうにもならない存在となる」。ならば、専門家や政府がなんとかしてくるのかというと、誰も責任をとれない、そのような状況のなかに自分が生きていることをまざまざと今回の福島は見せつけていると。

災害がおこると、ますますこのシステムは人間を追い込んでいき、いつのまにかシステムのための人間と化す。しかもこの広域システムは、小さなものを食いつぶしながら、

巨大化し、利益は中央に吸収され、地域にそのリスクを押し付けるのが、この広域システムの長特である。このシステムと個人の間に、小さな共有空間をつくり出すが急務となる。つまりは、3/11 を契機に問われているのは、たんにこれまでの技術知や科学知のありようだけではなく、進歩や技術への盲目的な信仰にたいする人文・社会知の応答責任の問題である。経済成長のさなか、「成長のための科学」は自然環境を破壊する社会が豊かな社会になるために容認し、科学技術の急速な発展が豊かであるとしてきた。しかし、その帰結は人間の健康や環境に危害を加え、これまで絶大な信頼をえてきた専門家や政府への信頼の低下、不確実なリスクが宿命であるかのようになってきたことである。

そして、一般的な危険がこの「リスク」に置き換えられるとき、安全なき社会の不安を和らげる概念として安全が登場する[三上剛史「安全安心」、「信頼」概念再考のために](ひょうご震災記念 21 世紀研究機構、ワーキングペーパー1、2008)]ように、日本社会のリスク観にはリスクの対句としての安心・安全が語られる特性を持っている。社会的な不確実性が増すなかで市民による公共社会の構築が必然である。いいかえれば、デモクラシーの問題に帰結することになる。

いうまでもなく、リスクとは、人間が行った行為によって被る損害の可能性、すなわち確率である。このリスクに対応できる社会のためには、ベックは、不安を共有する連帯とサブ政治という考え方を提供している。現代社会は不安を共有することによって連帯が生まれ、これが政治の力をなると解く。しかもそのリスクは、国境とは無関係であり、それであるからこそ『不安』も国境を越えて共有されることになり、リスクの共有する世界社会というユートピアからリスク管理が生まれ、新たな秩序形成の動機付けとなるという。ここに「連帯」の基礎が生じ、そして、リスクと連帯をつなぐ回路に「共生」への模索がはじまり、その「共考」する場としての地域社会や大学が果たすべき課題が生まれることになる。

本シンポでは、このような課題や観点から、専門分野を横断しながら、超学域的に論じあい、未来への『希望』を見いだす第一歩となることを願っている。そのために、忌憚なきご議論を期待したい。

02 日程

日時：2013年3月10日（日）13：00～17：00

会場：富山国際会議場多目的会議室

時間		内容
11：30	打ち合わせ 昼食	
13：00	挨拶	 遠藤 俊郎学長
13：10～14：30	基調講演	小林正弥（巻末「プロフィール参照」） 「東アジア公共圏における平和哲学の現在」
14：30～14：45	休憩	
14：45～16：45	討論セッション	・司会 佐藤 幸男 ・発題者 葉柳 和則、佐々木 俊三、李 起豪 ・ディスカッサント 具 甲祐、小倉 利丸、伊藤 智樹、森川 裕二 鄭 美香 （以上、巻末「プロフィール参照」）
16：45～17：00	総括	佐藤 幸男

03 基調講演

「東アジア公共圏における平和哲学の現在」

千葉大学法学部教授

小林 正弥

1 マイケル・サンデルの政治哲学

- (1) 3つの正義論：福利型（利己主義、功利主義）、義務・権利型（リベラリズム、リパタリアニズム）、美德型（コミュニタリアニズム）
- (2) コミュニタリアニズム：文脈重視、倫理性・精神性（善き生）＋共通性（共に）
- (3) 自己論：負荷なき自己 → 負荷ありき自己
- (4) 法的正義論：リベラリズムでは価値・世界観の多様性→「正義≡権利」
- (5) 倫理的正義論：「善き生」との関連における正義 平和・環境・福祉、東アジアの儒教的観念（義）などとの共通性？
- (6) 共和主義：ギリシャ→ローマ→イタリア→イギリス革命・フランス革命・アメリカ革命→アメリカにおける衰退
- (7) 公民性の政治経済：富と徳、独立自営の経済、賃労働との関係

2 公共哲学とは何か

- (1) 特質：学際性・実践性・対話性・精神性、
- (2) 意味：①広く人びとの行動や政策の指針となる。②公共性の実現を目指す。
- (3) 公共：公≡国家≡官、公／公共／私、個人性・多様性・異質性と共通性・社会性・普遍性、「共同」との相違、公共的公
- (4) 東アジアの公共哲学：溝口雄三・金泰昌、倫理的公（公平など）、天 韓国
- (5) グローカルな公共哲学：空間的・時間的拡大の必要性、グローバルかつローカル、国境を越える⇒東アジア公共圏、将来世代 generativity（世代継承・生成性）
- (6) 和：和して同ぜず（『論語』） 同質性への強制ではなく、多様性・異質性を前提とした調和

3 友愛平和の公共哲学

- (1) 友愛概念：自由・平等・友愛 愛（慈悲・仁）の社会的・政治的次元、コミュニティの絆、友愛は様々なコミュニティにおける普遍的理念
- (2) コミュニティ概念：「共同体」というよりも共和体、コミュニティ＋アソシエーション＝コミューナル・アソシエーション
- (3) 正義と平和：正戦論⇔戦後公共哲学＝平和公共哲学、非戦の哲学（内村・賀川・南原...） 最大の公共悪 戦争 平和の理念（自由・平等より大きい理念）→

平和公共哲学

- (4) 南原繁の平和哲学：正義（カント的）＋安寧・福祉（功利主義的）＝平和...コミュニタリアニズム的観念、「善き生」に基づく平和という正義
- (5) 友愛公共平和：外的 構造暴力（ガルトゥング） 政治・経済の抑圧構造
＋内的 深層平和（ディープ・ピース） 精神性 ディープ・エコロジーから
（表層平和の基礎となる世界観・存在論的哲学、平和観念）
（原子論的暴力⇔グローバル・コミューナルな平和観念）

丸山眞男「非政治的な市民の政治的な関心」

「深く内に蓄えられたものへの内的関心に支えられてこそ、...文化の（文化人のではない！）立場からする政治への発言と行動が本当に生きてくる」

双方のバランスが重要。

外面偏向（内的平和を無視した外的平和運動、闘争的）も内面偏向（外的努力を軽視した内的平和論）も歪み→内なる平和と外なる平和の好循環＝精神性・倫理性→友愛・和に立脚した平和。

・超個的・普遍的友愛（ディープ・ラブ＝深層愛、無私の愛）

→新世紀の精神革命としての友愛革命

- ・「公共的平和」＝私的平和（内面的平和）だけでなく、公的平和（外的平和）
だけでなく、人々が共に創り出す平和

4 生成的コミュニタリアニズムの平和論

- (1) グローカル・コミュニタリアニズム、ダイナミック・コミュニタリアニズム：
地球的平和 国民国家を超えた地球的公共善、東アジア共同体→地球共和体・地球連邦、将来志向的
- (2) 地球的・複層的コミュニタリアニズム：地球的平和主義であると同時に、国民国家の自衛も原理的には認める
- (3) 平和憲法のコミュニタリアニズム的解釈：墨守・非攻論、人権論
- (4) 生成的コミュニタリアニズム：宇宙論的（陰陽）・家族・子ども、女性性 ケアの倫理→平和
- (5) 東アジア的展開の可能性：陰陽、儒教的な「和」、ハン思想（全にして一）？
- (6) 友愛平和の風：アート・オブ・ピース＝友愛平和の対話・祈り（瞑想）・芸術、明るく、楽しい「ポジティブ・ピース・ムーブメント」

文献

- ① 『非戦の哲学』（ちくま新書、2003年）
- ② 公共哲学ネットワーク編『地球的平和の公共哲学——「反テロ」世界戦争に抗して』（公共哲学叢書2，東京大学出版会、2003年）

- ③ 小林正弥編『戦争批判の公共哲学——「反テロ」世界戦争における法と政治』（勁草書房、2003年）。
- ④ 千葉真・小林正弥編『平和憲法と公共哲学』（晃洋書房）
- ⑤ 小林正弥『原発と正義』（光文社新書）

<http://global-public-peace.net/> (短縮版)

友愛平和の風——世界へのアート・オブ・ピース

いま、日本は大きな分岐点にある。一方では、東日本大震災・原発事故によって、紫陽花革命と呼ばれるような官邸前の脱原発デモが大きな盛り上がりを見せた反面、原発を維持し、偏狭な国家主義を復活させる流れも存在し、日中韓の領土問題が激化して、武力衝突の危険すら生じている。

そこで、私たちは、広島・長崎の被爆や福島の前被曝という二重の体験に基づき、日本から、友愛（愛・慈悲・仁など）と正義を中心的理念として、反核脱原発・非戦、環境保全、貧困問題の解決などを論点として議論し、地球的ないし地域的な平和・良き環境・福祉の実現を目指して、なるべく多くの人びとの地球的結集を図りたいと思う。さらに、私たちは友愛に基づく政治や平和的経済、さらには友愛世界が実現することを目指す。

この大きな目的の実現には、人種・民族・宗教・価値観などの差を乗り越えて、友愛に基づき、「和して同ぜず」という「和」（調和）の精神で、超党派的・超宗派的に協力することが必要である。意見の一致を無理に求めず、個々人の行動の自由を尊重して、友愛に基づく対話によって、運動がダイナミックに発展していくことを目指す。その方法として、闘争的・暴力的な方法ではなく、内的平安に基づいて外的平和の実現を目指し、精神的な友愛に基づき、非暴力的なアート・オブ・ピースとしての「友愛平和の対話・祈り（瞑想）・芸術」を発展させたい。

私たちは、こうして、明るく、楽しい「ポジティブ・ピース・ムーブメント」を巻き起こし、友愛平和の風を地球中に吹き渡らせたい。それによって二度と被爆や被曝が起らないように力を尽くし、地球の危機を回避して、地球の友愛により平和・良き環境・福祉という公共善を実現することを、改めて心に誓う。

●呼びかけ人

稲垣久和（東京基督教大学教授・公共哲学）、上村雄彦（横浜市立大学教授・地球政治論）、鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学）、賀川督明（賀川記念館 館長）、加山久夫（賀川豊彦記念松沢資料館 館長）、きくちゆみ（環境・平和活動家／ハーモニクスライフセンター代表）、小林正弥（千葉大学教授・政治哲学）、三遊亭京楽（落語家・五代目円楽一門）、田口富久治（名古屋大学名誉教授・政治学）、千勝良朗（千勝神社 宮司）、千葉真（国際基督教大学教授・政治思想）、野田武志（有限会社オール・アズ・ワン）、長谷川智（湧気行代表）、平野慶次（京都市民）、比嘉良丸（こころのかけはし祈りの和）、深井慈子（千葉大学客員教授・国際政治学）、本山一博（玉光神社権宮司）、八代江津子（Tewassa 代表）、吉田魯参（仏法山禅源寺住持）、渡邊宗禅（臨済宗廣済寺住職）

●賛同人

青山治城（神田外語大学・法哲学）、新井光興（救世真教会長）、イソップ（南砺まちづくり市民会議）、板垣雄三（東京大学名誉教授・イスラーム学）、加藤節（成蹊大学教授・政治哲学）、古在豊樹（千葉大学名誉教授・農業環境工学）、鬼頭 秀一（東京大学教授・環境倫理学）、神尾学（ホリスティック・リーディング研究所）、木村智恵（世田谷区民）、黒住真（東京大学教授・倫理学）、小泉義仁（NGO スピリチュアル TV）、庄司真理子（敬愛大学教授・国際政治学）、佐藤香織（東日本大震災・心の交流会）、佐藤壮広（宗教人類学者）、佐藤学（学習院大学文学部教授・教育学）、佐藤秀海（家相建築設計事務所 代表）、佐藤 研（立教大学教授・宗教学）、島田和子（JAIA）、杉浦秀典（賀川豊彦記念松沢資料館 副館長）、鈴木規夫（愛知大学教授・政治学）、戸松義晴（全日本仏教会前事務総長）、西川潤（早稲田大学名誉教授・経済学）、坊理可（フィロソフィア）、細田満和子（星槎大学教授・社会学）、松本哲弥（㈱ナインハーツ取締役）、森中定治（日本生物地理学会・生物学）、宮平望（西南学院大学教授・神学）、山脇直司（東京大学・公共哲学）、芳村正徳（神習教教主）、渡辺和子（一般社団法人 命・地球・平和産業協会理事）、渡辺武達（同志社大学教授・メディア学）、渡邊りよ（フィロソフィア）

04 発題者資料

01 「震災の経験と大学の役割」

東北学院大学副学長 佐々木 俊三

1.

プロジェクト担当の方から、東北学院大学での地域復興支援の経験から得た視点について報告するようにと依頼を受けました。東北学院大学は『震災学』という冊子を刊行しております。これを編集する立場から語りたいと思いますが、与えられた時間は 20 分余りですので、ある側面だけを取り出し強調します。このフォーラムの趣旨とうまくそぐわないかもしれません。初めにそのことをお断りして、今考えていることを語りたいと思います。

東日本大震災が私たちに直面させたものは、深い意味での「経験」でした。「経験」は、私たちの身体に傷をつける仕方で、私たちに襲います。出生と別離と死が、この「経験」の典型的な事例ですが、これらが私たちに傷をつけるのは、これらを易々と飲み込むことが私たちには出来ないからです。出生や別離や死に際して、私たちは身を切られるようにつらい思いを経験します。こうした経験の質を、私たちは周囲の生活から追い出し、これを管理し、極度に安全な生活に導く方向へ進みました。出生は病院で、死もまた病院と施設と葬儀社の管理に委ねたのです。こうした趨勢は時代と社会の動きの結果ですが、その原因は、私たちの生活を安全で便利で快適で清潔なものに変えていく趨勢でした。その趨勢の結果として、私たちは、生きることに内在している否定的なものを遠ざけ、見ないようにし、丸め込んだのです。

震災は、私たちをこの管理とカプセル化から外へ引き出し、裸の状態に曝しました。動くはずのない大地が動きだし、襲うはずのない海が陸地へ侵襲し、絶対安全と言われた放射能が人々を難民と化したのです。私たちは震災によって、生の限界へと露呈されました。お金も家も銀行も信用も産業も経済も、そして行政も政府も効果を持つことのない生の限界。私たちは、文字通り所有のない裸の状態、すなわち無に晒されたのです。

2.

私たちを無に晒したこの出来事から、いったい何を大事なことで再認識せねばならないのか、その経験への反省を私なりの仕方で語っておきたいと思います。

その日、私は夜になって自宅に帰ることが出来ました。一階のガラス戸が皆壊れ、書棚からは書籍が散乱し、食器棚からは崩れ去った食器類が足を切るばかりの山のような

破片となって、散乱していました。もぬけの殻となったガラス戸からは、夜の寒い風が入り込み、カーテンを風になびかせています。私はあの光景を忘れることはできません。電気もガスも水道も来なくなった風通しの良い部屋の中で、私はまんじりともせず、起こった事の意味と影響について考え続けました。

まさに裸に晒された経験ですが、数日を経て、散りじりになっていた家族も集まってきて、ろうそくの光と即席のコンロで、戴いたご飯を暖め、まるで昔、人々が夜、炉辺の周囲に寄り集いながら食事をした原初の光景に帰ったかのような、小さな温かさの集いとなりました。懐かしい親密さの経験です。そしてこれは、私たちが忘れ去っていた何かだったと思いました。

もちろん、このことを取り立てて語るのには、社会的背景があるのです。私は、最近の学生の言動を端で聞いていて、奇妙に感じることもありました。女の子が、「ご飯食う？」と友達に尋ねるのです。その体験を一度ならずして、私は学生たちに注意し、こう言っています。「食う」と「食べる」は、根本的に違うことだと。「食う」は、空腹に駆られて口の中に食べ物を入れ、胃の腑を満たす行為、まさに生物であればどれも等しく行う行為なのです。しかし「食べる」は違います。「食べる」ことは、「食べ合う」行為なのです。たとえ私のお腹が減っていたとしても、皆が食卓に着くまで「食べる」ことを待たねばなりません。そして一日無事で生きながらえたことへの感謝をしつつ、自分に配分された食べ物を食べ、同じ食物を分け合い、食べ合うのです。「食べる」ことの後に団らんが訪れます。満たされた食感と、その日一日に起こった出来事について語り合い、休息し合うのです。「食べる」ことは、こうした一連の行為を意味していました。

3.

「食う」と「食べる」の差異をどのように考え規定したら良いでしょうか。「食べる」ことにおいて、食物の分配と分有とが行われます。食事に居合わせた人々にその分け前を分配することを、昔「タマス」と言いました。この古い由来を示す語について、柳田国男が『食物と心臓』で、注目すべき指摘を行っています。そしてその指摘は、「食べる」ことが「魂」に関わる重要な意味を持っていたことを理解させるのです。日向、椎葉村の狩りにおいて「タマス」という語が使われていたことに、柳田は注目しました。狩猟の獲物を解体してセコに分配する際に一人一人の取り分を「タマス」といい、また食物を少年少女に分配するのに各個の分け前を「タマス」と言っています。「食べる」と「タマス」という言葉が深い関連を持っていたことを暗示しています。そしてタマスがうどんのタマに繋がり、山の下刈りをした樹木の束のタマに繋がり、小児のタマに繋がり、鳥のタマゴに繋がり、靈魂のタマシイに繋がるという指摘から、「食べる」を意味する「タマス」が何らかの形で「魂」と繋がる問題を暗示していたことに認識が進みます。

柳田は、タマス・タマシが「個人私有の概念をなす」と言っていますが、その私有は狩猟における分配という行為と切り離すことはできません。狩猟において獲物を解体し、獲物の身体各部や臓腑をひとつずつばらばらにし、そこに居合わせた人々のひとりひとりに分配することにおいて、成り立っている私有なのです。分配の行われるときはまた、共同の食事の行われるときでもありました。そこで、集団における力とエネルギーの再配分が行われたのです。分配が所有関係を生み出し、与えるものと与えられるもの、贈与と負債を生み出しているのであり、そこに霊的な問題が関与してきます。

日本語大辞典を繙けば、「食べる」は、「たぶ（賜）」に対する謙讓語。「たまう（給）」と同じく、本来は「いただく」の意である」と記されています。「食べる」には、「本来神から賜ったものをへりくだって頂く」という受贈の関係が含まれていました。また、「タマフ（給ふ）」は尊敬を意味する助動詞ですが、この語の語源は、「タベアフ（食べ合ふ）」が「タバフ」「タマフ」へ転化したものか、「タマ（魂）・アフ（合ふ）」に由来するものなのか、いずれかははっきりとはしませんが、これらの語が表現している太古的關係に関連しているといって過言ではありません。いずれにせよ、「食べる」ことが「分け合う」ことであり、「分け合う」ことが「タマ」を共にすることであったのは明らかです。

4.

「食べる」ことの初めは、おっぱいをまさぐることでした。乳を飲むことが出来なければ、人はこの世に生まれて生きていく力を得ることはできません。赤ちゃんが「食べる」ことができたのは、母からの贈り物として乳が与えられたからであり、母の側に立って言えば、自らの身体を子どもに譲り渡す贈与によってでありました。「食べる」ことの初源がそこにあったと言うことは、「食べる」ことはまさに贈与として子どもに訪れたわけで、この共同性はけっして相互的ではなく、贈与を受けてこれを戴くことにおいて成り立った共同性なのです。第一にこのことを強調しておかねばなりません。

「乳母（チオモ）・湯母（ユオモ）」という古い言葉があります。オモとは母のことで、乳をくれる母を生母と区別して乳母（チオモ）と言ったのです。乳をくれる母の古い呼び名で、このチオモがウバとかメノトと呼び名を変えていきました。メノトとはおそらく女の弟（ト）、妻の弟（ト）の意味で、弟（ト）とは妹をも含めて年下の兄弟をいう呼称でした。したがってメノトとは妻の妹となり、チオモの役割を妹が姉とともに果たして、兄弟姉妹挙げて子供の成育に携わった時代があったことを暗示しています。ヒコホホデミの妻はトヨタマヒメですが、このヒメの赤子を妹のタマヨリヒメが育てています。ホノニニギにはコノハナサクヤヒメとイハナガヒメの姉妹が奉られています。戸井田はこの関連を語って、次のように述べています。「姉と妹とを妻とする結婚の制度があったと考えられる。メノト（乳母）はその慣習からきた名称であろう。姉妹の生んだ子に対して協力して乳を飲ませ、それによって、相互に結ぶ絆を強めていたのだ。その血縁の結合によって赤ん坊をより一層強く育てるために生みの母以外に乳母を求めて養育

に協力させたのであった」。

チオモの乳は、力（チカラ）のチに繋がります。乳兄弟という言葉があるように、結束の力を示すのは、この乳に繋がる絆の力、言い換えれば食べることによる絆の力なのです。そしてこの力（チカラ）のカラが、ウカラ・ヤカラのカラに繋がります。ウカラ・ヤカラとは族のことですが、ハラカラのカラすなわち同胞と同じく、胞を同じくする集団、同じ絆で結ばれている集団、食物をともにしている集団、すなわち共同体だったのです。こうした共同体には、タマがその実体として浮遊し動き、このタマによって人々は結束を強めることが出来たのです。同じ釜の飯を食べた人間同士には、タマが交換されたのであって、まさに「食べる」ことによってこそ友情や友誼の関係が築かれました。「食べる」ことが「食う」と全く違う意味をもっていたことは、もうこれで十分に認識できたと思います。

5.

ハラカラの関係は血縁の問題ではないことを強調しておかねばなりません。兄弟の契りは、食卓を共にし盃を交わすことによって生み出されます。フロイトは『トーテムとタブー』のなかで、砂漠民ベドウィン人の客人歓待に関わる習俗を採集しています。「砂漠民ベドウィン人とごくわずかな食事をわけあい、ミルクを一口飲ませてもらった者は、もはや相手を敵として恐れる必要はなく、相手から保護や助力が得られることを確信してよい」と語るのです。絆を作り出すものは、宗教でも血族でも土俗でもないのです。食べ合うことによる以外にありません。「神と食事をわかちあえば、それは、自分が神と同じものでできているという確信をあらわしたことになる、また他人だと思ふ人とは、食事をともにしないということになる」のです。乳兄弟の関係が生物学的繋がり関係ではないように、共同の食事によって得られる結合は、まさに食事による結合なのです。

このことを一番良く示している事例として、聖書に出てくるイエス・キリストの「最後の晩餐」の行為を問題にしてみましょう。聖書には最後の晩餐の場面が次のように記述されています。

「イエスはパンを千切って、「これを取りなさい、これがあなたがたのために与えた私の体である。私を記念してこれを食べなさい」と言い、同様に彼は杯をとって、「みな、この物はこの杯から飲みなさい。これはあなたがたや多くの人の罪が赦されるために流された、私の約束の血である。私を記念してこれを飲みなさい」と言う」。

千切られたパン、杯につがれた葡萄酒は、千切られたイエスの肉、流されたイエスの血なのです。パンを食べ、葡萄酒を飲む者は、したがって、イエスの肉を食べ、イエスの血を飲む者であることになります。イエスの肉を食べ、イエスの血を飲む者は、そのことによってイエスの内に留まると同時に、イエスを自分の内部に留まらせるのです。

分ち合ったパンは同じ一つのパンから千切られたものであり、分ち合った葡萄酒は同じ一つの杯から飲み干されています。解体された熊の肢体が順序よく元の身体へと復元

され、復元された熊の身体が集団全体を一つの身体として象徴するように、この同じ一つのパン、同じ一つの杯は、会食を行う個別者がそこで合一しあう共同性そのものの肉であり、血なのです。イエスはそれを「これは私の体であり、これは私の血である」と語ります。

そこにはパンとイエスの言葉、パンとキリストの肉、葡萄酒とキリストの血、食べることと食べる人、食べる人と食べる人同士の統一が一つの事柄として成立しています。晩餐という食べることそのことにおいて一挙にそれらの関係の輪がつながるのです。千切られた一口のパンを口にふくむとき、パンはパンであり、キリストであり、食べるもの同士の共同性となります。これは、食べることに於いて、食べる者同士の精神が、魂として出現していることだ、と云って過言ではないでしょう。食べることは、こうして、魂を出現させ、魂を出現させることに於いて、精神と一つになります。事例は違っても、結局は同じことが、ここにもあそこにも出現しています。

震災の経験は、私たちを裸に晒しました。裸に晒されることを通して、何が大事なことで何が大事ではないことなのかが、次第に明瞭になってきました。私はその一つのことを強調しています。私が分析した「食べる」行為は、小さな集まりとなって身を寄せ合った人々のどこにでも、電気の無いろうそくの光のなかで、ささやかだが暖かな何かを告げるものとして現象しました。それこそ、「食べる」ことに於いて出現した、「食べ合う」者同士の共同性だったのです。そしてこの共同性においてこそ、子の魂に父母の魂が繋がり、父母の魂に祖父祖母の魂が繋がり、こうして幾世代となく繰り返されて来た「食べる」行為において、祖先の人々の変らざる営々とした生の営みが継続されて来たのです。私は、このことを、震災が露にした貴重な経験として、語っておきたいと思いました。

6.

もう一つ、付け足しのように加えておきたいことがあります。「住まうこと」についてです。「食べる」ことは、結局、「食べ合う」人同士の「魂」の関係となりました。だが、もう一つ、大事なことがあります。「食べる」ことは、「火」を中心にして行われることです。「火」という暖かさを中心に、人々は集まり、そして「食べる」のです。「食べる」ために料理が必要になります。そして料理は、炉の「火」によって可能となりました。人間は火を操ることによって動物の中で特異な地位を獲得し、寒冷に耐えるとともに、食材を料理し、暖をとり、火の周りに集って、料理の文化を研ぎすませていったのです。

「住まう」ことの原型を考えると、粗末な竪穴住居に遡ります。その竪穴住居の中央には、炉がしつらえてあり、そこに火が灯っていたのでした。家の中心、住まうことの中心には炉が無ければなりません。炉が食材を料理するとともに、この料理を仕分けし、その仕分けに応じて炉を囲む人々に食が分配され、そして食後もその炉の近くで暖

をとり、その周囲で身体を寄せ合って寝たのです。まさに「住まう」ことの中心に「火」が存在したのです。

台所の神様である竈神は、神々の歴史の中でも最も古い神様であると言われています。そのはずです。人間が生きるには、住まいが無くてはなりませんし、住まいには必ず火が無くてはなりません。その火を絶やさずに活かすには、炉や竈が無くてはなりません。生きることはこの条件とともに可能となったのです。だとしたら、昔の人々が「食べる」ことにおいて、このように活かされていることに感謝しつつ、食べるものを賜り、食べさせて頂くことに感応し、食べることへの感謝とともに食べ合うことの絆を強めて来たのは、まさに台所の火によって可能だったことになります。

この台所の火を絶やさずに守って来たのは、女性でした。生きることにおいて女性が果たして来た力は甚大です。乳を与え、世代の連続を可能にし、家の成員に料理を配分し、台所を守り、火を培って来たのは、まさに女性という性だったのです。

震災は私たちを裸に晒しました。裸になった私たちが、生活をもう一度立て直そうとするとき、見えてきたことは、「食べること」と「住まうこと」の意義でした。

7.

東北学院大学は、被災地の大学として、被災後直ちに「災害ボランティアステーション」を設立しました。近隣の被災地、被災家族のために要請された支援を行っていくことと並行して、全国の大学が私たちの大学を中継して、被災地支援に入りました。こうして「大学間連携ボランティアネットワーク」が立ち上がったのです。現在、このネットワークには九州の大学から関西、首都圏の大学を併せて、87の大学が参加してくれています。これらの大学間連携において、夏休みに合宿ボランティアを行っています。一週間のクールで被災地に合宿を行い支援をするのですが、大事なことは、現地の人々に寄り添うボランティアであると同時に、「食べる」と「住まう」ことを共にし合う学生同士の関係を作り上げることでした。彼らは、現場に身を曝すことを通じて何かを感じ取り、そしてそれを語り合うことを通じて相互の経験を交流させ、そして共に「食べる」ことにおいて、何かの絆を作り出していったのです。これは貴重な経験でした。

最初にお話したように、現代の学生は家族や社会から安全で便利で清潔な環境に囲い込まれています。旅行でやってきて遠足のようにしゃぐ彼らが、現場を見た途端、一様に沈黙し、言葉をつまらせ、そして言葉を探り出し、異口同音に「何かをしたい」と語ります。現場に赴くことは、彼らにある意味で裸に曝すことになるのです。それは、経験を還元し痛みを伴わない生活へと彼らを囲い込むのとは裏腹に、彼らに経験を促し、それぞれの経験に基づいて言語化を促すことでもありました。学生はボランティアを行い、ある特定の場所と人々へと持続的な関係を結び、自らが求められている存在だと認識したとき、変わることができます。持続的なボランティアの経験によって、何人もの学生が地域に入り込むことの意義を獲得し、今の社会で生きることを見直しています。

生き方を変えた学生を多く見て来ています。大学はこの意味で、彼らが経験を深化させる機会を準備し、その枠組みを保障し、経験を教育へと整えて行く必要があるでしょう。

被災された方々についていえば、彼らは忘却されることを恐れています。人々に注目されることなくひっそりと生きて来た被災地の人々からすれば、被災の後になおも人々が忘れることなく訪れてくれ、近況を尋ねてくれることを嬉しく思うのです。高齢の被災者には、未来がありません。生きて行くことは、希望とともにでなければ、立ち上がることもすら可能となりません。人々が彼らを忘れた時にこそ、私たちは彼らに寄り添い、彼らのもとに通い、ともに生活を立て直す場に居合わせなければならないと思います。それこそ、被災者の喪失した経験に届いて、彼らの魂に近づくことだと思っています。

阪神・淡路の震災は、ボランティアが社会に重要な意義を持つきっかけとなりました。東日本大震災によって、特に大学生のボランティアが社会に意義を持つ転換点となりました。しかし、既述したように、ボランティアは一過性の支援に留まっていい訳はありません。持続性が要求されています。ある地域、ある固有の人々、ある風土、ある習俗に関わって行くことで、初めてボランティアはその存在する意義を発揮します。このように語ることは、ボランティアがボランティアに留まるのではなく、フィールドワークに移行していくべき必然性があると語ることになります。現場や地域に学生が持続的に関わることにより、彼らが故郷に帰るように現場に赴けば、それは彼らを安全の傘の中から外へと送り出し、自分の力で生きることへの意義と責任を経験し、新しい自己を準備することへと促すことになるでしょう。ボランティアが教育になりうるということは、そういう可能性を見越していることにほかなりません。

一つの大学があらゆる地域をカバーすることはできません。多くの大学が協同し、組織を作り直し、それぞれの地域へと赴き、支援の連携組織を作ることが必要だと思います。東日本大震災において、被災地の大学であった東北学院大学が、連携のハブの役割を果たしました。しかし、災害は思わぬ時に思わぬ所で思わぬ形で襲います。新たに災害が発生した暁には、連携のハブの機能をその災害の地に移動させ、多くの大学が協同して支援に動くことが必要だと思います。すなわち、今後、この連携のハブの機能の形式化が必要となるでしょう。だがその前に、新しい災害に対処する以上に、取り残され忘れられた被災地の支援を継続して行かねばならないと思っています。

02 「自然・他者・記憶」

共生の3つの局面と持続可能な東アジア交流圏をめぐる

長崎大学環境科学部教授

葉柳 和則

1. 3つのキーワード

私は、長崎大学の重点研究課題の1つ採択された研究プロジェクト「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー——「共生」概念の学際的統合にもとづいて」、通称「東アジア共生プロジェクト」のリーダーを務めています。本日はこのプロジェクトのコンセプトと現在の取り組みについてお話しさせていただきます。

私は環境科学部という学部の教員です。環境科学においては、「共生」概念は「**自然との共生**」に限定して捉えられる傾向が強くあります。他方、社会学においては、この概念は、自分とは度量衡を異にする主体と共に生きること、すなわち、「**他者との共生**」という意味でも使用されます。さらに、「過去」ないし「記憶」もまた、主体が自らの生の現在と未来を意味づける際に繰り返し参照されるものであり、その意味において「**記憶との共生**」という概念を導き出すことができます。後に少し詳しく触れますが、長崎というトポスで生活していることによって初めてこの「記憶との共生」という概念が生まれてきました。これら3つの共生概念が私たちのプロジェクトのキーワードです。（「共生」という概念について考えるとき、もう1つ「社会的弱者との共生」という側面に着目することの重要性については、私たちも認識していたのですが、「東アジア」という枠組みと結びつけていくだけの知的贅力が私たちになかったことと、メンバーの専門性の制約もあり、プロジェクトの構想の中に入れることができませんでした。）

2. 東アジア交流圏

日本、中国、台湾、韓国、さらにはタイ、インドネシア、ベトナム等から成る東アジアはかつて、海流とモンスーンが作り出した海流、すなわち柳田國男「海上の道(the sea roads)」によって密接に結ばれた交流圏を形成していました。そこでは王朝国家の時代において既に経済的、政治的、そして人的交流がなされ、その結果として文化的混淆、共生、創造が生み出されていました。こうした社会・文化的混淆は近世において1つの頂点を迎えます。

しかし、19世紀以降ヘゲモニーを獲得した国民国家中心の社会・文化的価値編成の枠組みにおいては、こうした地理的・社会的・人的連続性をもった交流のあり方は、国境線に沿って寸断され、同時に周縁化されてきました。20世紀のナショナリズムとそれが引き起こした第二次世界大戦は共生的な交流圏の寸断と周縁化の帰結であると見ることができます。ここで生み出された戦争の記憶は、今日なお東アジア交流圏の再生に

とっての躰きの石となっていることは誰しも認めるところだと思います。それどころか東アジアにおいては、国境周辺の島嶼の領有権をめぐる争いを、国民統合のための資源として活用する動きが顕著に見られるようになってきました。

第二次世界大戦後の国際秩序もまた、この寸断線としての国境を自明の前提としていました。とりわけ日本語の「国-際」すなち「国の際」という言葉には国境の自明性が刻印されています。しかし、資本の移動がもたらす世界システムのグローバル化と EU のような国境の持つ意味を希薄化させる地域統合の試みの進行する現在、国境内での中心と周縁モデルに依拠した社会・文化的価値のマッピングはその有効性を失いつつあります。国民国家モデルはさらに、汚染物質の越境に典型的に見られるように、自然科学レベルでの地域対立をも生み出しています。このように、従来の国民国家モデルとは異なった、別様の社会・文化モデルを共有することなしに東アジア交流圏の再構築は不可能な状況にあるのではないのでしょうか。

3. 長崎というトポス

長崎は、アジア全体というマクロな視点から見ても、あるいは国民国家日本という視点から見ても、地理的な周縁に位置しています。しかし、長崎は長きに亘って、対馬海流が作り出す海上の道における人間と生物の移動のインターフェイスとして機能してきました。これは、鎖国政策と出島築造という特異な歴史的背景と相まって、この都市の固有性となっています。さらに、近世においてはキリシタンに対する迫害、20 世紀においては労働者の強制連行、原爆被災といった世界史的に見ても固有の出来事が生起することにより、長崎は世界において他に類を見ない自然的、社会的、歴史的、文化的、そして意味論的な重層性を帯びたトポスとなっています。

私は 2000 年の 10 月に長崎大学に着任したのですが、急な坂道の多いこの街を歩きながら、所々に残された出来事の痕跡や記念碑を目にする中で、哲学者の野家啓一さんが『物語の哲学』という書物の中で提示している「時は流れない。それは積み重なる」というテーゼを、具体的な空間のリアリティとして感じ取ることができました。先ほど触れた「記憶との共生」という考えは、この経験がきっかけとなって生まれたものです。

4. 「共生」概念の統合

「共生」を鍵語とする研究は、環境学、社会学、歴史学、政治学、思想といった諸領域においてなされていますが、そこには大きな問題点があります。それは、それらの研究が相互にほとんど無関係なままに理論的、実証的、実践的なレベルで遂行されていることです。個々の領域において生み出された成果は少なくありませんが、それらを統合的に論じる試みはいまだわずかなされています。

しかし、いくつかの先駆的研究は、「共生」概念の統合に向けた示唆を与えてくれます。1 つは、フェリックス・ガタリ (Félix Guattari) の提示した「エコゾフィー

(ecohsophy)」ないし「3つのエコロジー(Three Ecologies)」というモデルです。ガタリは、「激烈な科学技術による変容」は、「地上における生命の存続を脅かしており」、「私がエコゾフィーと呼ぶところの、3つのエコロジー的な作用領域——すなわち環境と社会的諸関係と人間的主観性という3つの作用領域——の倫理-政治的な接合だけが、この問題にそれ相応の照明をあてることができる」と述べています。

私たちの3つの共生概念の対象領域はかなりの部分、ガタリの言う「3つのエコロジー」に対応しています。しかし、ガタリの提示する概念はあまりにも包括的かつ多義的であり、それを具体的な調査研究の理論と方法の中にどのように反映させていくのかという問いが残ります。たとえば、「精神的エコゾフィー」は「身体や幻想、過ぎゆく時間、生と死の〈神秘〉などに対する主体の関係を再創造する方向にむかわなければならない」とガタリは書いていますが、これを「研究プロジェクト」という世俗的な枠組みの中で取り扱おうとすれば、文学や宗教学を社会学や人類学、さらには組織論や政治学といった領域を横断的に架橋する理論と調査のセットを作り出すことが必要となります。

もう1つは、アルジュン・アパデュライ(Arjun Appadurai)が、現代の「グローバルな文化的エコノミー」を、「既存の中心-周縁モデルに依拠」して理解するのではなく、「複合的で重層的、かつ乖離的な秩序(a complex, overlapping, disjunctive order)として見るために提示した5つのランドスケープ、すなわち、「エスノスケープ、メディアスケープ、テクノスケープ、ファイナンスケープ、イデオスケープ(ethnoscapes, mediascapes, technoscapes, financescapes, and ideoscapes)」という概念のセットです。これらの「5つのランドスケープの関係は、客観的に与えられるものではなく、したがってどの視角から見ても同じように映るわけではなく」、「むしろその関係はパースペクティブに応じて構築され、歴史的、言語的、政治的に状況づけられた行為者による屈折を受けている」のであり、「それぞれの行為者は、パースペクティブに応じて構築された一群のランドスケープが宿る決定的な場所でさえある」とアパデュライは述べています。アパデュライの提示するランドスケープ概念と私たちの共生概念との間には、対象領域の拡がりや切り出し方に違いがあります。しかし、ランドスケープという比喻によって「グローバルな文化的エコノミーの5つの次元」の複合と重層と乖離を記述するというアパデュライのアイデアは非常に魅力的です。というのも私たちは長崎という固有の「歴史的、言語的、政治的」トポスを主要な拠点にして、主体に立ち現れる現実を解明するという方法を採用しているからであり、「複合的で重層的、かつ乖離的な秩序」として東アジアを構想し直したいと考えているからです。

東アジアの研究者による共生概念の再検討の試みとしては、尾関周二、卞崇道(Bian Chong-dao)、吉田傑俊(Masatoshi)らによる日中共同研究が注目されます。彼らは、「人間と自然との共生」と「人間と人間との共生」という2つのアスペクトを共生社会の理念として掲げています。この意味において、彼らの共生概念は私たちが提示してい

る「自然との共生」、「他者との共生」と対象領域を同じくしています。しかし、彼らの試みの根底には、「環境問題」と「多文化主義」という現代の人文社会科学の主要イシューに対して、歴史的唯物論をいかにして適合させるかという問いがあるという点で、私たちとは前提を異にしています。このことは、彼らの共生概念が、ガタリ の提示する「精神的エコゾフィー」、ないし私たちの鍵語である「記憶との共生」の次元を他の共生領域から相対的に独立した領域として捉えてはいないという問題につながっています。

私たちはすでに平成 20 年度から、長崎大学内において小規模な研究プロジェクトを試行しており、2 度のシンポジウムを 2009 年に開催して、「共生」概念の多元性に関する理論的検討とそれを別様の「東アジア」の捉え方へと展開する可能性について検討しました。それを踏まえて、2010 年に 6 年の計画で長崎大学の重点研究課題に応募しました。2012 年以降は、3 年間にわたって科学研究費の補助を受けることによって、環東シナ海域をフィールドとした調査研究を行っています。長崎を中継点としながらも、淡江(台北)—沖縄—奄美—天草—長崎—対馬—釜山—上海の空間的布置によって形成される圏域全体を視野に入れ、「自然との共生」、「他者との共生」、「過去との共生」が交叉し、連接する局面を調査の対象としています。

具体的には私たちは以下の調査プロジェクトを計画しています。

1. 長崎、沖縄、淡江（台湾）、上海、釜山における環境と他者をめぐる意識調査（自然-他者）

中国と日本の「コミュニティ」の在り方の比較という視角から、コミュニティ感覚と部外者としての社会的・文化的他者に対する意識の相関や、環境行動の相関を数量的に調査します。この調査は、東アジアを——Benedict Anderson の言う意味での——1 つの共同体として想像するための基礎的データを提供する予定です。

これについては、長崎をフィールドにした一次調査が終了し、研究成果を公表する段階に入っています。次に上海で実施する計画を立て、具体的な交渉に入ったところで、日中関係の悪化のためにいったん中断という状況です。現在は韓国海洋大学の協力を得て釜山での調査を検討しているところです。

2. 斜面都市（淡江、長崎）における緑地環境と社会の関わりの変遷（自然-過去）

この調査では、斜面に立地と立地条件が類似しかつ古くから人的交流があった淡江・釜山・長崎の 3 都市を対象に、緑地環境と社会・文化的諸条件の関わりの変遷と現在を明らかにします。

これについても長崎をフィールドにした調査とその成果は現在出つつあります。しかし、「斜面都市」という枠組みではなく、「海港都市」という枠組みの中で、理論と方法を立て直すことが重要ではないかという方向で議論が進んでいます。

3. 近世から近代にかけての長崎における対東アジア世界観の重層性の解明（過去-他者）

近世の長崎においては、出島を舞台としたオランダとの交流のほか、唐人屋敷を中心とした中国大陆との交流、対馬を舞台とした朝鮮半島との交流が行われました。この調査では、長崎に残された近世から近代にかけての種々の交流の記録を使用語彙に焦点を当て調査することにより、日本の（長崎の）東アジア観の変遷を解明します。

現在のところ、明治から大正にかけて長崎で発行された新聞、とりわけ『鎮西日報』の記事を手がかりにして、近世の長崎における——ベネディクト・アンダーソンの言う——「われわれ」意識が、「日本人/中国人」という差異の線に拠っていなかったこと、そこでは環東シナ海域の海港都市としての「長崎人」という意識が共有されていたこと、それが国民国家の国境線によって「われわれ/やつら」へと分断されるきっかけが日清戦争にあったこと、といった新しい発見が生まれています。

4. 長崎原爆をめぐる記憶の語りにおける社会的差異線の地政学（過去-他者）

長崎原爆をめぐる語りは、旧市街と原爆が投下された浦上地区という地理的差異線、仏教・神道とカトリックという差異線、日本人と中国・韓国人、被差別部落とその他の地域という複数の差異線が絡み合っている。その諸相を聞き取り調査、記念碑調査、新聞メディア調査によって解明したいと考えています。また、中国、韓国、台湾において、原爆投下をめぐる一連の出来事がどのように記憶され、語られているかを聞き取り調査することによって、被爆の記憶を分有する可能性を探っていきます。

原爆をめぐる記憶についての調査は、「ポスト 3.11」という言説の枠組みの中に原爆被災という出来事を包摂する前に、この出来事とそれをめぐる記憶それ自体について、人文・社会科学が調査し、思考し、それを共有していくべき、しかも喫緊の課題としてそうであるということを私たちに教えてくれました。

これについては、昨年シンポジウム「記憶の風景とその表象」、今年はシンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」の中の長崎の記憶関連の分科会において、他大学の研究者を交えて成果の報告と議論を行い、今月の後半からワーキングペーパーシリーズの刊行が始まります。

5. 移動と越境をめぐる東アジア近代史の捉え直し（過去-他者）

東アジアの近代史を「移動と越境」という視点から描き直すことは、「東アジア交流圏」の構想にとって必須の課題でした。しかし、プロジェクトが立ち上がった時点では、この問題に直接関わることのできるスタッフが不在でした。そのため、2011年度に「中国帰国者の境界文化」を専門とする研究者を採用し、この5番目の柱を強化することにしました。現在はこのスタッフを中心にして、近代東アジアの思想、歴史、社会を「移動と越境」という観点から統合的に捉える調査プロジェクトと出版計画が進んでいます。

以上の調査プロジェクトにおいて私たちが強く意識しているのは、自然-他者-記憶の接続する局面を捉えることです。ガタリが示唆しているように、自然の共生にしる、他者の共生にしる、あるいは記憶との共生にしる、これらの接続が実現することなくして、

より正確には、これらの「共生」の一つが欠けてしまっただけで、私たちが持続可能な社会を構築していくことは不可能となります。これは、PM2.5 と呼ばれる、微小粒子状物質の越境移動が、単なる環境汚染の問題ではなく、度量衡を異にする他者との共生の問題でもあり、また、その共生を可能にするためには、自らの記憶と他者の記憶が「複合的で重層的、かつ乖離的」に生きられている東アジアにおいてどのような未来を構想していくのかという問題とも密接に関わっています。3つの「共生」概念を統合的に捉えることの実践的意味はここにあるのです。

05 参加者プロフィール

【基調講演者】



◇小林 正弥（こばやし まさや）

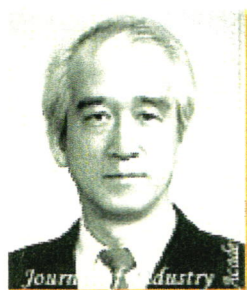
千葉大学法経学部教授。

政治学者。専門は、政治哲学。東京大学法学部を卒業後、東京大学法学部助手、千葉大学法経学部助手、1992 年同助教授を経て、2003 年から同教授。2008 年より千葉大学法経学部法学科教授。

公共哲学の研究を通じ、ハーバード大学のマイケル・サンデルと交流をもち、NHK 教育テレビ「ハーバード白熱教室」で解説者を務めた。主な著書に、『政治的恩顧主義論——日本政治研究序説』（東京大学出版会、2000 年）、『非戦の哲学』（筑摩書房、2003 年）、『友愛革命は可能か——公共哲学から考える』（平凡社、2010 年）、『サンデルの政治哲学——〈正義〉とは何か』（平凡社、2010 年）。マイケル・サンデル『ハーバード白熱教室講義録＋東大特別授業（上・下）』（早川書房、2010 年、監訳・解説）（下記 URL）。TV ハーバード白熱教室 - 解説。TV 番組では『NHK 白熱教室 JAPAN（2011 年 1 月 9 日～30 日 全 4 回講義）』を担当。

<<http://sandel.masaya-kobayashi.net/>>

【発題者】



◇佐々木 俊三（ささき・しゅんぞう）

東北学院大学 副学長、学長室長

1947 年生まれ。1971 年上智大学文学部一般哲学科卒業。1979 年東北大学大学院文学研究科博士課程中退。東北学院大学教養学部教授を経て 1994 年より東北学院大学教養学部教授、教養学部長等を経て、2010 年より現職。東北学院大学災害ボランティアステーション所長として、震災・原発に関わる研究または知的支援活動」をテーマに学部横断プロジェクト学部横断研究プロジェクト「震災・原発に関わる研究または知的支援活動」を展開する（下記 URL）。主な論文・著書として「書字と像——ヘーゲル『エンチクロペディー』の言語論に寄せて」（『文化』第 46 巻第 1・2 号）、「ペルソナと他者性」（『東北学院大学論集』第 107 号）ほか。イボリット『現代の思想（上）』（共訳、朝日出版社、1989、訳書）。

イボリット『現代の思想（上）』（共訳、朝日出版社、1989、訳書）。イボリット『現代の思想（上）』（共訳、朝日出版社、1989、訳書）。

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/volunteer/?page_id=8245>



◇葉柳 和則（はやなぎ・かずのり）

長崎大学環境科学部教授。

専門は、テキスト分析、ドイツ文学、文化社会学。文学博士。大阪大学大学院およびチューリヒ大学第一哲学部（スイス政府給費留学生）において理論・方法論を発展させ、戦後スイスを代表する劇作家・小説に関する論文・著作を多数発表（『経験はいかにして表現へともたらされるのか—M・フリッシュの「順列の美学」』鳥影社）。第6回日本独文学会賞を受賞。平成22年度から長崎大学重点研究事業「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー」（平成22～27年度、略称・東アジア共生プロジェクト）のプロジェクトリーダー。東アジアの文化・経済交流の歴史と現在を捉え直すことによって、東アジア交流圏のあり方を探究中（下記URL）。

<<http://asia.prj.nagasaki-u.ac.jp/>>



◇李 起豪（YI Ki-Ho）

韓国ハンシン大学教授、平和と公共性センター所長。

専門は国際政治学、平和研究。韓国延世大学で政治学博士号取得。韓国延世大学社会科学研究所主席研究員、早稲田大学訪問学者、聖公会大学教授を経て、現職。韓日市民社会の比較研究活動のかたわら東アジアの平和問題に取り組む。2003～2006年まで平和フォーラムの事務総長を務め、北東アジア地域協力下における朝鮮半島の平和協力をテーマに活動を展開。2008年には、知識人ネットワーク Nautilus Institute との連携の下でARI（the Asia Regional Initiative, 邦訳「アジア地域構想」）発足メンバーとして加わり所長に就任。主要論文に「生活政治の観点から見た韓国と日本の市民運動の比較研究」「韓米関係の発展のための国会の対外的役割：韓米関係の行為者を中心に」などがある。

【討論者】

◇具 甲祐（KOO Kab-Woo）

北韓大学院大学校教授。

専門は政治学、外交論。韓国で唯一の北朝鮮問題を専門とする大学院、北韓大学院大学校教授として、国際政治理論、北東アジアの地域協力、朝鮮外交、市民社会と東アジアをテーマに幅広く国際関係の研究を手がける。韓国ソウル国立大学で博士号取得（政治学）。主な著書・論文（英文）として、*Critical Peace Studies*（邦題『批判的平和研究と韓半島』）、*Regional Cooperation in East Asia and the Korean Peninsula*（邦題『東アジアと韓半島における地域協力』）など多数。日本語著書としては『東アジアの

地域協力と秩序再編』(2012年、共著)。

◇鄭 美香 (Chung Mi-hyang)

早稲田大学社会科学部研究科 (博士課程)

韓国国立釜慶大学卒業後、日本留学し創価大学国際学部を経て平成24年早稲田大学社会科学部研究科修士課程 (国際関係学専攻) 修了。同年4月より同研究科博士課程。専門は国際関係・平和学。研究テーマは朝鮮半島非核化構想および原爆被爆者の韓国帰還民の研究。

【富山大学関係 (司会・討論者)】

◇佐藤 幸男 (さとう・ゆきお)

富山大学人間発達科学部教授、富山大学 (文科省特別経費) 教育研究事業『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』(CEAKS、平成22～24年度) 代表。

専門は国際政治学、南北問題。明治大学大学院政治経済学研究科修了後、広島大学総合科学部、名古屋大学大学院国際開発研究科助教授、富山大学教育学部教授を経て、2005年から現職。2009年から富山大学副学長。著書に『開発の構造—第三世界の開発/発展の政治社会学』同文館出版、『国際政治モノ語り—グローバル政治経済学入門』、法律文化社、2011年。

◇小倉 利丸 (おぐら・としまる)

富山大学経済学部長、教授。CEAKS「人の移動/人間の安全保障」チーム代表。

専門は現代資本主義論、情報資本主義論。現代資本主義社会への批判的な視点からの「民衆の安全保障」を研究テーマとする。単著として『グローバル化と監視警察国家への抵抗 戦時電子政府の検証と批判』(樹花舎)、『多様性の全体主義・民主主義の残酷 9・11以降のナショナリズム』(インパクト出版会)、『抵抗の主体とその思想』(同) など多数。CEAKSでは、「富山市在住日系ブラジル人児童・生徒の実態調査」を市民団体関係者と合同で実施した。

◇伊藤 智樹 (いとう ともき)

富山大学人文学部准教授。

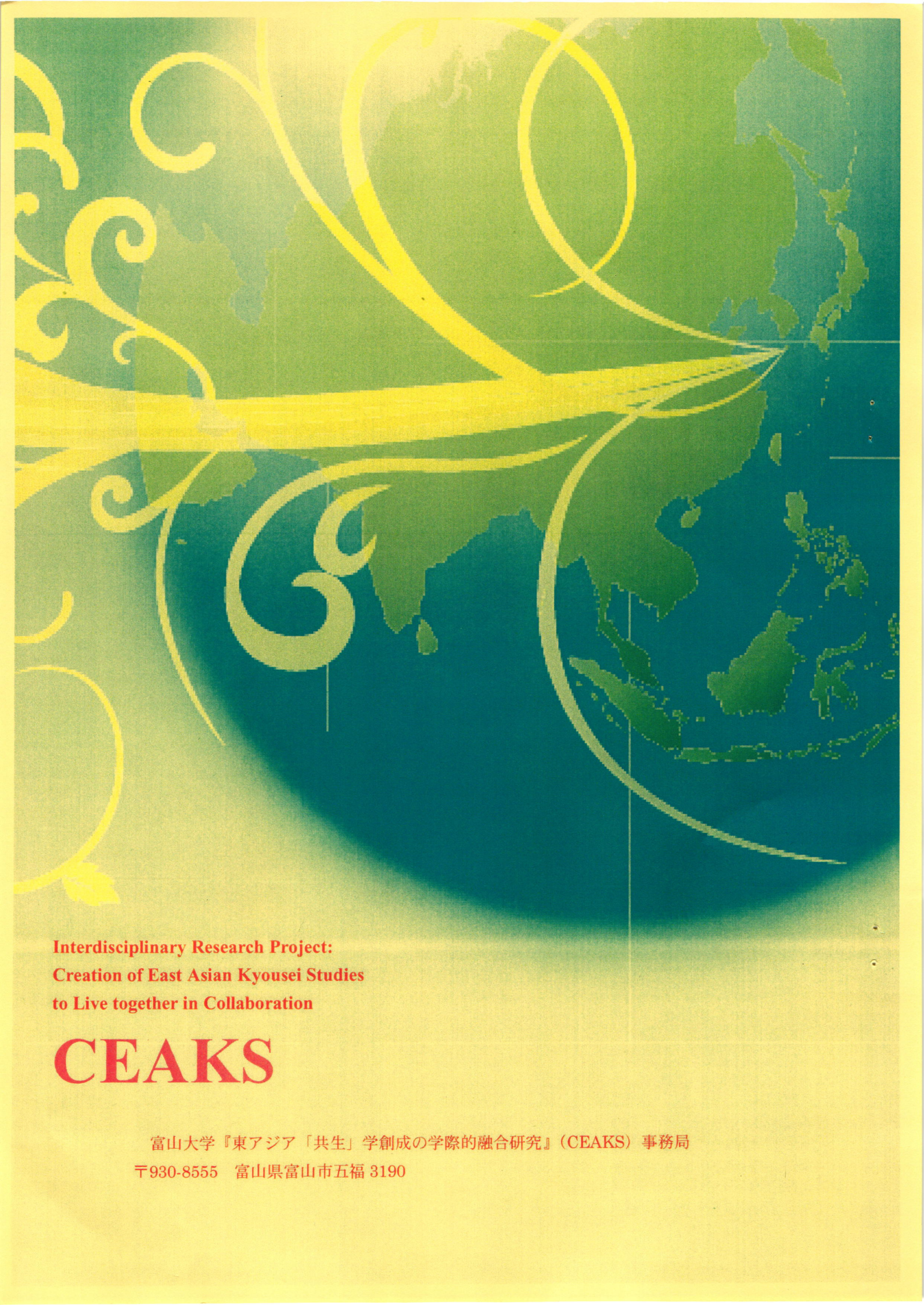
専門は医療社会学。アルコール依存、死別体験、吃音 (きつおん=どもること)、神経難病などのセルフヘルプ・グループ (自助グループ) にフィールドワークを行ない、自己物語形成による希望の創出という観点から研究発表を行ってきた。今回の東アジア共生学創成プロジェクトでは、神経難病等をもつ人々の生存と希望の基盤となる社会制度の現状を分析した。主な著書として『セルフヘルプ・グループの自己物語論—ア

ルコホリズムと死別体験を例に』(ハーベスト社, 2009 年)。

◇森川 裕二 (もりかわ・ゆうじ)

富山大学極東地域研究センター特命助教、

『東アジア「共生」学創成の融合的研究』事務局担当。 専門は国際政治学(理論と方法)、アジアリージョナリズム。博士(学術、国際関係)新聞社・通信社を経て2006年に早稲田大学21世紀COE『現代アジア学の創生』研究員。2010年6月より現職。著書に『東アジア共同体の構築: 図説ネットワーク解析』(共編)など。



**Interdisciplinary Research Project:
Creation of East Asian Kyousei Studies
to Live together in Collaboration**

CEAKS

富山大学『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』（CEAKS）事務局
〒930-8555 富山県富山市五福 3190